令和８年１０月３０日

９年生保護者のみなさま

羽曳野市立はびきの埴生学園
校　長　東　　浩　朗

令和８年度「全国学力・学習状況調査」について

清秋の候、保護者のみなさまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素より本校の教育活動にご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

さて、今年度実施いたしました、文部科学省「全国学力・学習状況調査」の分析結果について、以下のように報告させていただきますので、よろしくお願いいたします。

令和８年度「全国学力・学習状況調査」分析結果

１．はじめに

全国の中学３年生（９年生）を対象とした「全国学力・学習状況調査」が実施されました。今年度は４月２３日に国語・数学・英語が実施されました。この調査結果を分析することで、本校生徒の実態や課題を明確にし、学力向上のための学習指導の改善に活かしていきたいと考えております。

既に配布しました個人結果とあわせてご覧いただき、ご家庭でも本調査の結果についてお話していただきますよう、よろしくお願いいたします。

※今回お知らせする結果は、学力や学習状況の一部分であり、子どもたちの学力や学習状況、学校の教育活動などのすべてを表すものではありません。

２．結果の分析と今後の課題

（１）国語

【成果】

助動詞の働きや、単語の活用について理解しているかを確かめる問題の正答率が、大阪府平均を上回っていたものがいくつもあった。このことから、文法に関して正しく理解できていることが伺える。また、文章全体を三つに分けて整理する問題の正答率が、全国平均を上回っていたことから、文章の中心的な部分と付加的な部分について理解して読みとれていることが分かる。記号を選ぶ問題の無解答率が０％だった問題が多かったことから、意欲的に問題に取り組んでいる様子が分かる。

【課題】

自分の考えを根拠を持って書く、表現を工夫して書く、という問題の正答率が大阪府平均や全国平均より低い。また、記述式の問題の無解答率も他の問題より高いことから、考えや思いはあるもののどう書いていいのか分からない生徒が多いことが伺える。問題を解く前から書くことに対して苦手意識が強く、無解答率が増えるのだと考えられる。

【課題克服のために】

書くことに対する苦手意識をなくすために、さらに、自分の考えを、根拠をもって書く練習をする機会を設ける。その際、自分の意見を書くだけではなく、仲間の意見を聞いて何を感じたのかを問いかけ、自分の考えを再度見つめ直す時間もつくりたい。作文や論説文などを書くときは、書き方の型を学んで、書く練習をすることで、応用力をつけさせたい。また、日頃の授業から「自分ならどうか」と考えることを習慣化し、言語化させるように努める。

（２）数学

【成果】

数学における成果として、基本的な計算問題や定型的な知識を問う「数と式」などの領域において、全国や大阪府の平均水準に迫る良好な正答率を示している点が挙げられる。特に、選択式問題や単純な短答式問題における正答率は比較的高く、日常の授業を通じた基礎的・基本的な知識や技能が一定程度定着していることが確認できる。また、図形の基本的な性質を用いた角度の計算など、公式や定理を直接適用して解を導く問題に対しても多くの生徒が正確に解答できており、これまでの基礎学習の成果が着実に表れている。

【課題】

課題として浮き彫りになったのは、「数学的な見方・考え方」を活用して問題を解決し、その過程を言葉や数式で論理的に説明する記述式問題での正答率の低さである。特に「関数」や「データの活用」領域において、日常の事象を数学的に捉え直す問題や、複数の情報を組み合わせて推論する問題で平均を下回る傾向が見られた。解答状況を分析すると、記述式問題における無解答率（白紙）の高さや、説明が不十分な解答が多く見受けられ、思考力・判断力・表現力を問う非定型的な応用場面でのつまずきが明らかである。

【課題克服のために】

課題を克服するためには、単に公式を当てはめて答えを出すだけでなく、「なぜその式になるのか」「どのように考えたのか」を筋道立てて考え、表現する活動を日常の授業に組み込むことが重要である。例えば、ペア学習やグループワークを通じて

自分の考えを言葉で説明し合う機会を設けたり、多様な解法や誤答例を比較検討したりする工夫が必要である。また、身の回りの事象を数学と結びつける「数学的活動」を充実させ、答えが合っているかだけでなく、問題解決のプロセス（過程）を重視し、粘り強く記述に取り組む姿勢を育成する必要がある。

（３）英語

【成果】

受容的スキルである「聞くこと」や「読むこと」において、一定の定着が見られる。特に、職場体験の順序を選択する問題（問題 4）の正答率が 75.0%（全国 43.8%）、物語の読解問題（問題 9）の正答率が 76.5%（全国 49.0%）となるなど、選択式問題で全国平均を上回っていたものがいくつもあった。このことから、音声や文章から情報を正確に読みとれていることが分かる。

【課題】

課題として浮き彫りになったのは、「書くこと」を中心とした表現力・発信力の不足と、それに伴う記述式問題での無解答率の高さである。特に、自分の考えや思い出を理由とともに英文で表現する問題での正答率が全国平均より低い。解答状況を分析すると、インターネットに関する意見を書く問題（問題 10(2)）の無解答率が 39.6%（全国 14.6%）、中学校の思い出を書く問題（問題 12）の無解答率が 41.2%（全国 8.7%）と高くなっている。問題を解く前から英文を書くことに対して苦手意識が強く、考えはあるもののどう書いていいのか分からずに無解答率が増えるのだと考えられる。

【課題克服のために】

書くことに対する苦手意識をなくすために、短文作成や穴埋め問題などのスモールステップから取り組み、白紙を出さずに粘り強く記述に取り組む練習を行う。作文を書くときは、「意見＋理由」や「出来事＋感想」といった書き方の型を学んで練習することで、応用力をつけさせたい。また、日頃の授業において、強みである「聞く・読む」活動で得た情報に対し「自分ならどうか」と考えることを習慣化させ、自分の意見や感想を英文で言語化させる機会を増やすよう努める。

３．生徒質問紙より

【成果】

「学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めているか」という質問に対して「当てはまる」と強肯定を示した生徒は 60.4%であり、全国平均を 10%以上上回っている。また、話し合い活動に関しての、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりできているか」「友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組ん

でいるか」という質問に対して肯定を示した生徒はいずれも全国平均を上回っている。学園全体として「集団づくり」を素地としていることの成果が学力向上の面でも出ていると考えられる。「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」という質問に対して、「当てはまる」が 43.8%、「どちらかといえば、当てはまる」が 52.1%であり、合計 95.9%という極めて高い割合の生徒が肯定を示している。また、「困りごとや不安がある時に、いつでも相談できる」についても肯定的な回答が 72.9%と高い水準である。先生との良好な信頼関係をつくり、安心感が学校生活の楽しさや学力向上にもつながっていると考えられる。特に国語では、「1、2 年生のときに受けた国語の授業で、先生は、あなたの良いところや、前よりもできるようになったところはどこかを伝えてくれたか」に対し、「よくある」と回答した生徒が 68.8%に達しているこれは、大阪府（31.7%）、全国（25.5%）を大きく上回っている。また、「学習のうまくできていないところはどこかを伝え、どうしたらうまくできるようになるかを教えてくれたか」に対しても、「よくある」が 47.9%（全国 45.3%）と高い水準になっている。

【課題】

「学校の授業時間以外に、普段、1 日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」という問いに対し、「3 時間以上」（14.6%）、「2 時間以上、3 時間未満」（18.8%）と、長時間学習層が存在する一方で、「30 分より少ない」（12.5%）、「全くしない」（2.1%）という無学習層も一定数存在する。また、「土曜日や日曜日など学校が休みの日の勉強時間」において、「全くしない」生徒が 16.7%（全国 13.4%）存在することである。「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」に対し、「できている」と回答した生徒は 37.5%に留まり、全国平均の 50.8%を大きく下回っている。「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」に対し、「できている」と回答した生徒は 37.5%に留まり、全国平均の 50.8%を大きく下回っている。自ら目標を設定し、学習方法を選択し、実行をふりかえり次の学びへサイクルを回すことができないため、自分から学習に向かうことができない生徒が多数存在していることが予想される。

「普段（月曜日から金曜日）、1 日当たりどれくらいの時間、スマートフォン等で SNS や動画視聴などをしますか（学習やゲームの時間は除く）」に対し、「4 時間以上」と回答した生徒が 45.8%に達している 。全国平均が 20.8%であることを踏まえると、かなりの生徒が平日の放課後の大半をスクリーンタイムとしていることになる。同時に「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」に対し、「あまりしていない」（25.0%）および「全くしていない」（2.1%）と回答した生徒が計 27.1%に上り、全国平均の合計（19.3%）を大きく上回っている。思春期の長時間のスクリーンタイムが不規則な就寝時間につながり、学習や学力の定着が不安定になる。

「学校の授業時間以外に、普段、読書をしますか」に対し、「全くしない」が 37.5%

である。あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか」において、「0～10 冊」が 33.3%（全国 16.2%)、「11～25 冊」が 27.1%（全国 20.5%）と、家庭内の蔵書数が全国と比較して少ない。読書をすることで体系的な知識や読解力を習得でき学力向上に結び付くことは質問紙と正答率の関係から明らかなので、情報センターとしての学校図書館を中心として、読書離れによる学力低下を阻止したい。

【課題克服のために】

強みである「対話力」「表現力」「教職員との信頼関係」を主軸としながら、「自ら考え、学びを進めていける学習者」を育成することであると考えられる。

授業ではもちろん、家庭学習でも自分の学習状況を把握し、自ら学習内容や方法を選択して、計画的にコツコツ進める、そしてその学習や取り組みを客観的にふりかえり、次の学習に進めるというＰＤＣＡサイクルの定着をめざす。そこで授業から、自律学習の「何をすべきか」「なぜこれを学ぶのか」を具体的にどの教科でも提示していくこと、様々な形態の授業からや本やＩＣＴから情報を得て、協同的な学習の中で見識を広げていく取り組みをふやすことで、自分自身のキャリア形成のために自律して学習に向かう動機をつくれる機会を増やしていきたい。教職員がファシリテーターとなり同時にその学習自体をふりかえり次にむかってアップデートできる機会を創出していきたい。

また、ICT を活用した授業を、主体的・対話的な学びをより深めるためのツールであることを意識して構築し、自分自身の学びを深めたり広げたり、多様な意見や考えを共有しながら協同できることを実感できる時間をとっていきたい。教職員全体も ICT を活用した学習方法の見識を増やす。

学習であっても図書であっても生徒へ「やりなさい」だけで終わることなく、具体的な学習方法を示しながら、学習を１人ひとりに寄り添いながら進めることができるように、家庭とも協同していきたい。「良いところを伝え」「改善点を教える」という視点をすべての教職員が持ち、「教科の質問」だけでなく、「なぜこの学習計画は失敗したのか」「次はどの学習方略を試すべきか」「どんなことができるようになり、それが次の学びにどう広がるのか」という、1on1 の学習コーチングを意識して生徒と向き合っていく。

４．おわりに

今回の全国学力・学習状況調査の分析より、成果や課題が見えてきました。特に課題については、子どもたちの実態に即した取り組みを進めて行くことで、本校の「めざす子ども像」につながっていくと考えております。

これからも子どもたち一人ひとりの成長を、私たち教職員とともに見守っていただきますよう、よろしくお願いいたします。